

ドラマをつくる

——ビデオを使った授業——

星 崎 幸 子

はじめに

I. なぜビデオドラマなのか

- 1) なぜビデオなのか
- 2) なぜドラマなのか

II. ドラマへのステップ

- i ドラマ制作宣言
- ii 準備期間
- iii 本番

III. 感動の名場面集 & NG 集

おわりに

はじめに

「ドラマをつくる」作業は、他の授業で学習したものを使用する場を提供するものであり、学習者の自主性を尊重することで、学習者の授業に対する意欲を引き出すことを狙ったものである。作業ではビデオを使用する。学習者の日本語使用現場を録画し、日本語の発音、文法、表現、姿勢等のチェックや反省等に用いる。本稿は、学習者の作った脚本で、学習者自ら演じたものを録画したビデオドラマについて述べる。

I. なぜビデオドラマなのか

1). なぜビデオなのか

以下の4点の利点が挙げられる。

ア. 意欲を高める

イ. 発音、文法などのチェック

ウ. 表現の正確さ、適切さ

エ. 文化交流

ア. 教室で行われるスキット、ロールプレイの観客はクラスメイトだけである。いわば、授業時間内に完結してしまうものである。しかし「ビデオ」は残る。授業時間はもちろん、いつでも、どこでも再現可能だ。被写体の学習者は、クラスメイト以外の観客の目を初めから意識せざるを得ない。「うまくやらなくちゃ」ということになる。この緊張感が学習意欲を高める。

さらに自分の演じたいタイプの人物を演じることができ、しかも登場人物全員が主役というドラマだ。ビデオの中に、自分の顔のアップや名セリフを見たり聞いたりできる。ビデオが一般家庭に普及していることからわかるように、これらも意欲を高める要素である。

イ. 意欲を引き出すだけではない。ビデオは再現できる。だから再生された画面を見ながら、発音、文法などのチェックができる。話している時は夢中で、間違いにも気がつかない。落ち着いて見れば、教師の指摘を待たずに自分で訂正できることも多い。画面を見て初めて自分がどんなことを口走っているのかが分かる。自分の日本語を離れて見ることにより、その実態を知ることができるというわけだ。

ウ. また、口頭表現の作業で要求されるものは正しい発音、表現、適切な音声、態度であるが、ビデオに撮る場合は、機械を通すので、より一層、正確さ、適切さが要求される。電話で話す時、より明瞭な発音、適切な音量が要求されるのと同じである。

エ. 完成したビデオを学習者にコピーして渡す。それは青春の思い出

でもあり、日本みやげでもある。帰国後、世界各国の家庭で、学校で、ビデオ観賞会が行われる。世界のどこかで、日本語に興味を抱く人が現れないとも限らない。文化交流のいい機会となる。以上の点が、ビデオを使う理由である。

2). なぜドラマか

ロールプレイ、スキット類は、時間が短く、場面数も少ない。「ドラマ」はクラスにもよるが、十分前後のストーリーのある作品である。衣装、小道具も用いるし、ロケも行う。衣装、小道具といっても本格的なものではないが、振り袖、ウェディングドレスなどを使用したこともある。ロケは、学校の近く、歩いて十分以内の所と限ってはいるが、住宅展示場のモデルハウスの中でロケを行ったこともある。衣装も小道具もロケもみんな学習者の意欲を引き出す道具である。

自分達で作ったオリジナル脚本を暗記することになる。脚本は教師のチェックがはいっており、文法的な誤りはない。次に暗記したものを、表現する。表情、姿勢、声の出し方、体全体を使って表現する。完全に覚えた日本語は応用力の源となる。

作業において教師はいわば映画監督のような役割をする。そこで教師が心しなければならないことがある。出来上がったビデオは一つの結果に過ぎない。主眼は、作品を完成させることではない。作品の完成にいたるまでの一連の作業こそ主眼とするところである。発音を分かりやすく、表現も自然なものにしようとする姿勢、脚本完成までのディスカッションの積み重ね、完成した脚本を暗記すること等が重要なのである。ドラマ完成までにそこにもう一つのドラマが存在するとも言える。ビデオの完成を焦って、その前の作業をおろそかにしては本末転倒になってしまう。じっくり腰を据えて取り掛からねばならない。

II. ドラマへのステップ

教室での作業はだいたい次のように行われる。

- i ドラマ制作宣言
- ii 準備期間 . . . 1. オーディション(観察)
 - 2. 短編ドラマ
- iii 本番 1. チーム作り
 - 2. 脚本作り
 - 3. リハーサル
 - 4. 本番
 - 5. 反省, チェック

i. ドラマ制作宣言

「このクラスで、ドラマを作って、ビデオに撮りましょう。ビデオは学期末に皆さんに一本ずつ、プレゼントします。」と新学期の初日に、教師が発表すると、おもしろそうだという意見と「えー!」という意見に分かれる。「えー!」というグループには、実は二つタイプあって、その大半は口では「えー!」と言っているが目が「おもしろそう」と言っているタイプで、心底、いやそうなタイプはごく少数である。その少数のタイプも作業が進むうちに、だんだん積極的になり、撮影当日はびしっと衣装をきめてきたりするから心配はいらない。「えー!」の大合唱は壮大なドラマの序曲と考え、教師は自信をもって前に進むべきである。

ここで、学習者の背をそっと押す意味で、先輩たちの作品を見せると、具体的なイメージも湧いて来るし、意気込みも変わって来るので、過去の作品を二三例見せるのも良い。

ii. 準備期間

1. オーディション(観察)

学期初めに、ドラマ作りの予定を発表しても、すぐには本格ドラマ作りには取り掛かれない。準備期間が必要である。試験が集中する期末の本番撮影は避けたいのだが、どうしても一定の準備期間が必要である。他の授業を進めながら準備を始める。

この準備期間は学習者の適性を教師が見定める時間である。教師はアン

テナを広げ、密かに観察を始める。映画監督によるオーディションといっても本番の主演を探すのではない。脚本作りの作業のキーパーソンを探すのである。アイデアマンとまとめ役。この二人は各チームに必ず入るようにしたい。学習者の日本語能力はもちろん、性格、友人関係、相性等、時間をかけて観察し、チーム作りに必要な情報を集めるのだ。

日本語能力については、話す、聞くに重点を置いて観察する。教師の質問に対し、正しく答えるか、ということだけでなく、どう答えるかということもポイントである。月並みな答え方をするか、ひと味違った答え方をしようとするか等、答えの発想、切り口等を観察する。どういう答え方をするかは、日本語能力との関係は薄く、むしろ学習者の資質によることが大きい。人と違った発想の持ち主は豊かなアイデアの持ち主が多い。発言の回数は少なくても、冷静な説得力ある発言をする人は、皆から一目置かれ、まとめ役に向いているし、実際、チームが難局にぶつかった時に、かじ取りをすることが多い。キーパーソンの日本語能力が必ずしも高くある必要はない。それなりの能力で、どうにか切り抜けることができる。

性格については、協調性があるか、自己主張が強いのか、内気か、目立ちがり屋か、恥ずかしがり屋か等、個々の性格を観察する。誰の隣に座ることが多いか、休み時間は誰と話しているか等も観察する。あまり接触していない人同士でも、うまくやっていけそうか等の対人関係を見る。本誌第32分冊「船長からの手紙」でも述べたが、新学期の初日の自己紹介に「生きていくために必要不可欠なものを四つ挙げなさい」という課題を与えて発表させる工夫も性格の観察に一役買う。

観察はさりげなく行うを旨とすべしである。学習者は教師の言動に敏感に反応する。観察されていると感じ、学習者が萎縮することは避けたい。学習者の自主性を尊重した作業では、学習者がのびのびと振る舞える環境作りは教師の役目である。

2. 短編ドラマ

短編ドラマを作る。これは本番のドラマではなく、観察作業の一環とし

ての実験である。教師は学習者を観察。学習者は発音、文法、表現等の反省が主目的である。粗筋を決め、だいたいのせりふは決める。ぶつつけ本番でビデオに撮り、反省、チェックに重点を置く。実は初級のクラスはこの作業で終了する。残念だが、時間のかかる本番撮影はスケジュール的に不可能だ。

短編ドラマには、次の三つのタイプのドラマが向いている。ラブストーリー、連続ホームドラマ、サスペンスである。粗筋(状況)は教師が決める。どう展開させるかは学習者が決める。クラスの構成メンバーにより粗筋は変えてゆく。

@ラブストーリー

男女比によりストーリーは変わるが、ラブストーリーは多種多様であり、発展させやすいテーマである。たとえば、「今日は恋人の誕生日だが、急用で行かれない。友人に待ち合わせ場所に行ってもらうが…」と設定すると、恋人役、友人役は喜々としてドラマを作る。

@連続ホームドラマ

まず、家族作りをする。四、五人のチームを作る。それが一つの家族になる。家族の人物像を各自決める。それを発表する。次に教師が課題を与える。たとえば「転勤」、「交通事故」、「朝起きて、新聞を取りに行ったらポストの中に二百万円入っていた。」などである。家族内で二つのグループに分かれ、ドラマを作る。他のチームとも係わるようにする。

@サスペンス

チーム対抗犯人探しを行う。各チームが「事件」を作る。発表時に他のチームが犯人探しをする。

撮影後、ビデオを再生する。初級の場合は基本的な反省になる。中級以上はそれに加え、気の利いたせりふを考える。きちんとした脚本なしに行うとどうしてもだらだらと長いものになってしまう。三分位のドラマと言っても実際にはその倍位になってしまうことが多い。長くて退屈な作品にならないようにするためにはどうしたらいいか考える。

以上で準備期間は終了する。

iii 本番

1. チーム作り

本番にむけてのチーム作りである。準備期間中観察して得た情報を基に、チームを作る。教師の役割のほとんどは、この部分にある。1チーム二名以上、五名以内は厳守。理想は1チーム四名である。同国人は避け、男女比も均等になるようにする。母国語の使用を避け、せりふの量に片寄りのないようにするためである。まず人数からチーム数を割り出す。各チームに、アイデアマンとまとめ役を配する。他の学習者を日本語能力と性格、相性等を検討し、各チームに振り分ける。非常に神経を使うところだ。どういうチームを作るかは、ドラマ作りの成否を決定する重要な鍵と言えるからだ。

チーム作りでは欠席者とクラスのまとまりの二点が問題となる。長期にわたる作業であり、しかもチームワークなので、欠席は他の人の迷惑になることを認識させなければならない。学習者の欠席と性格に問題があり、チーム分け発表を予定より二週間先に延ばしたクラスがあった。さんざん迷って、これでよしと思い発表するつもりで教室に行ったが、また迷ってしまう。それを二回繰り返した。こういう経験は初めてであった。良く言えば個性的、悪く言えば協調性に欠けるクラスで、クラスの人気者、積極的まとめ役といった人のいないクラスであった。十五名のクラスだが誰か一人が欠席ということが多く、全員が集まることの少ないクラスであった。決して不真面目ではないのだが、受ける印象は、なにかバラバラなクラスといったものだった。十五名を五名ずつ三チームに分けた。そのうち二チームは、もし〇〇さんが来なかったらどうするかということを考えながら脚本作りをした。しかし、本番当日は欠席者ゼロでほっと胸をなで下ろした。

2. 脚本作り

教師主導のチーム分けとは対照的に、完全に学習者主導で行われる。教

師は各チームを回って、必要ならば助言を与える。あくまでも助言であって、押しつけることのないようにしなければならない。自主性を尊重したい。

テーマを決め、登場人物を決める。この段階で配役が決まり、脚本を作っていくチームもあれば、脚本が出来上がってから配役が決まる場合もある。浮かない顔をしている学習者は役に不満をもっている可能性がある。その場合は教師が積極的に打開策を打ち出す必要が生じる。あるチームではバーのママとホステスが登場することになった。ホステスは振り袖を着て登場。けちでいじわるなママ役の学習者は顔色がいまひとつ冴えない。そこで、ママがけちでいじわるになった理由がわかる場面を入れることを提案した。振り袖を着た若いママが恋人に裏切られる場面がプロローグとして入り、いじめの場面も力が入ったいきいきとしたものになった。

脚本が出来上がったら、教師がチェックする。チーム毎に面接で行う。文法の誤りは正す。場面に相応しい表現を一緒に探る。

3. リハーサル

この段階になると、チーム内の結束が強まる。同時にチーム対抗意識が出て来る。本番で他のチームをあとと言わせたい。だからリハーサルは他のチームには見せたくない。ということで空き教室を探し、そこで行うことになる。

教師が立ち会い、脚本通り、やってみる。発音、発話のスピード、音声などを指導する。大事なせりふがある。それが聞き取れなかったら、ドラマは台無しなので、あわてず、はっきり言うように指導する。

また、衣装、小道具、ロケ地等についても話し合う。

4. 本番

当日朝から緊張しているのは学習者だけではない。教師も、緊張する。時間内に終了するか、カメラは大丈夫かなど不安になる。本稿執筆時点までのところ、当日の欠席者はおらず、天気にも恵まれ、無事終了している。しかし緊張の為か、言い間違えたり、笑ってしまったりで、意外に時

間がかかる。

また、ロケ現場で学習することも多い。社長の家の玄関で、新年の挨拶をする夫婦が立った場所は、二段ほど高くなっていた。社員夫婦がコートを着たまま、しかも、社長の方が低い状態で挨拶するのはおかしいと指摘し、チャイムを鳴らす前にコートを脱ぎ、階段はさっさと下りて挨拶するよう指導した。教室では、コートも着ず、床も平らだったので、ここはさっと過ぎてしまった場面であった。

当日まで教師にも内緒にしていた、突然ミュージカルを始めたチームがあった。チームだけで集まって練習していたと言う。本番までの作業を通して、学習者の意欲が高まり、本番ではいろいろ工夫したり、アドリブも出たりする。学習者が楽しみながら学習していることがわかる。

5. チェック、反省

教室でビデオを再生する。短編ドラマと違って、完成度が高いので、チェック、反省と言うより、観賞会と思った方がよい。

以上で作業は終了する。

III. 感動の名場面集 & NG 集

次に紹介するのは、ビデオカメラを回す映画監督(教師)を思わず感動させた場面集である。

1. タイトル「ドラ息子」(上級)

このドラマは「ドラキュラ」に材を取ったものである。結婚式の場面の神父役に他のチームからの友情出演を依頼することになった。その風貌、雰囲気から、ある学習者が選ばれた。出演依頼を受けたことに周りの者が驚いた。この学習者は、人前で話すことに強いコンプレックスを抱いており、緊張のあまり、目をばちばちさせ、口ごもったり、あるいは目を閉じてしまい何も言えなくなってしまうことが多い。準備期間の短編ドラマを作る時も、緊張のあまり何度も笑い出してしまう、四回の NG の後、やっと撮れたということもあった。

本番では、声が小さいため NG を一回出したが、次には、しっかりと大きい声で、はっきり言えた。しかし、その後である。とても信じ難いことが起こったのは。式の途中、花婿がドラキュラだと分かり、それを見破った者と花婿が争う場面になる。すると、あの神父さんが、なんと右手と左手の人差し指を十字にして、ドラキュラの方に向けているのである。十字架のつもりである。これは脚本のどこにも書いていない。練習中にも見られなかった。全くのアドリブである。

何が彼をそうさせたのか。それは演じる楽しさではないだろうか。しかも、「外国語で」である。普段、悪戦苦闘している日本語だが、教師のチェック済みで誤りはない。何度も練習し、すらすら言えるのである。

2. タイトル「アラジン」(中級)

口頭表現はだめでも、読解が得意とか、漢字は読めなくても、話すのは得意とか、学習者にはいろいろなタイプがあるが、この学習者は、総合的に能力がクラスの下の方に位置していた。自国では優秀な学生であったが、他のクラスメイトに比して、学習時間が短過ぎたのである。そのうえ、性格も問題であった。クラスをかき回すとか自己中心とかいうのではない。全く逆のタイプで問題であった。回りに気を使いすぎるのである。言いたい事が言えない時、言えるまでがんばるなどという事はできない。他の人が退屈してしまうのではないかと考えてしまうからだ。だから、よく冗談でごまかしてしまう。一見ひょうきんな人のように見えるが実はそうではない。体は大きいが、神経はとても細やかだ。その学習者がビデオコンテストで、最優勝賞を、もう一人の学習者と競っている。読み上げられる票を真剣に見つめている横顔は感動的であった。

ビデオコンテストはすべてのクラスで行うわけではない。コンテストでしこりが残るようなことはないのだが、コンテストが楽しめるようなクラスで行いたい。幸いこのクラスはとても仲の良いクラスで、楽しい雰囲気の中行われた。審査員は出演者全員。各人が自分を含めて三名、記名できる。この時は日本人の観客が五名おり、合計二十名で審査した。僅差で最

優秀賞は逃したが、十四名中、堂々二位であった。作品賞はこのチームが取った。

このチームは男二人、女二人、計四名のチームで、全体的におとなしいタイプの学習者で構成されている。誰かがぐいぐい引っ張って行くのを待っていても、ちがいが開かない。全員で力を合わせて、テーマ、脚本作りを完成させなければならない。冗談言ってごまかしてはいられない。

こういう状況の下、この学習者はアイデアを積極的に出し、粘り強く交渉し、チームをリードしたり、小道具の絵を描いたり、大活躍した。撮影当日、ドラマの展開はもちろん、自分のせりふも完全に頭に入っており、撮影合間にメモを見ることも一切なかった。長い文章もすらすらと言え、よく練習したあとがうかがえた。クラスメイト及び日本人の審査員たちはそれを評価したのだ。

もし他のチームに入っていたら、こういう活躍はなかったのではないだろうか。冗談めかしてごまかしていたのではないだろうか。少人数のチームで、学習者自ら動かなければならない状況が、通常の授業ではなかなか発揮できない能力を引き出したと言える。

3. タイトル「ラブストーリー」(初級)

これは、ラブストーリータイプの短編ドラマを行った時の事である。男子学生にデートしないかと誘われた女子学生役の学習者が、言いたいことが言えずに困っている。しきりに手を動かして、バナナの皮をむくような動作を繰り返す。口では何やらもごもご言っているが、こちらが聞き取れるのは、「...か、か、か、か、...なかなか」だけである。彼女の意図を先に理解したのは、他の学習者たちであった。「先生、あれ、あれ」とみんながバナナの皮をむき出し、「かな、かな、かな」の大合唱となった。必死に手を動かす姿から、教室でのある作業を思い出した。

それは動詞の辞書形、及びその否定形を学習していた時のことである。この練習は単調になりがちなので、ある工夫をした。まず、はさみと赤、青、黄色、ピンクなど、いろいろな色の紙を用意し、学習者に花を作らせ

る。くるくると巻き、筒状にしたものの下の部分を持ち、上から 2/3 位の所まではさみをたくさん入れるとガーベラの花が出来上がる。そこで教師が見本を見せる。花占いをするのだ。

「今日はボーイフレンドとデートです。」

と言って時計を見る。

「遅いですね。」

そこでガーベラの花の花びらを一枚ずつちぎりながら、

「来る、来ない、来る、来ない、,,,,,,」

と花びらがなくなるまで続ける。

次に、「どうしようかな」を導入し、場面を与える。「天気予報では今日は晴れると言っているが、雨が降りそうだ。かさをもって行くか」「ほしいものがセールで売っている。でも、まだちょっと高い。買うか。」などである。「どうしようかな。買おうかな、どうしようかな。」と言ってから、花を持ち、「買う、買わない、買う、,,,,」と言いながら、花びらをちぎる。

あの動作はこの時の花びらをちぎる動作だったのである。学習者はデイトに誘われ、その返事に困った時に、迷っていることを表現したいと思った。その時、「花占い」を思い出し、「花をこうやってちぎった時のあの文どう言えいいんですか」という訳で、しきりに手を動かしていたのである。つまり、デイトの誘いに対し「どうしようかな、行こうかな」と言いたかったのである。

初級では、ドラマを作る時、授業で学習したものをフルに利用する。場面が与えられ、その場面に実際に身を置く。すると、そこで表現したいこと、表現すべきことが出てくる。既習項目の中から必死に探し出す。そしてそれを使ってみる。それができれば、初級のドラマ作りの目標は達成したと言える。

都合でこのドラマはビデオが使えず、テープレコーダーだけであったが、今でも、この学習者の必死な姿は忘れられない。具体的な場面を与えられ、それを自主的に展開させていく作業は学習者の表現欲求を強く刺激

し、高い学習効果が得られると言えよう。

次に紹介するのは、NG 集である。教師の機械操作のミスが多い。マイクのスイッチを入れ忘れた。録画したものの上に撮影してしまい、前のを消してしまった。冷房の部屋で、カメラを離して撮ったため機械の音が大きく、せりふがよく聞き取れなかった。ロケで見物のおばあさんの大きい声が入った。等々。

一度つかえると同じ個所でつかえてしまうことも多い。最高記録は十回の NG。笑いも厄介だ。緊張するとなぜか笑い出す。笑いはうつる。カメラを回す教師も笑い出す。カメラが揺れる。全く手に負えない。

教室で再生して初めて気がついたミスもある。プロポーズの場面だ。
男「君の子供たちのお母さんになってほしい。君の子供を産んでくれないか」

女「嬉しい。ずっと、その言葉を待っていたの」

僕と君を間違えている。とんでもないプロポーズになってしまった。言った本人はもとより、カメラを回している教師もチームメイトも気がつかなかった。何回も練習して一度も間違えたことがないのに本番で間違えてしまった。

もっと重大なミスもある。全く教師の責任である。夫婦喧嘩の場面で、妻役のとても優秀な学習者のせりふがおかしい。夫の頬の打ち方が悪く、二度、三度取撮り直すが、同じ間違いをする。おかしい。脚本のチェックし忘れた。優秀な学習者だけに完璧に暗記してしまったのだ。ここで気がついたからよかったが、もし気がつかなかったらと考えると、背筋が寒くなった。おかげで夫役の学習者の頬は赤く腫れてしまった。

おわりに

「学習者の自主性を尊重する」「各人の個性が発揮できる場を提供する」という二点を作業の中心に据えるのは、学習者の意欲が、学習成果を左右すると考えるからである。学習者は具体的な場に身を置き、そこで自由な

発想で、既習項目を使い、体全体で表現することになる。教師は舞台の上の黒子のような役割をする。主役はあくまでも学習者である。

最初にビデオを使った時は、教室の中で、衣装、小道具などなしに、撮影するつもりであった。しかし、学習者たちが自主的にいろいろ揃えて来た。泥棒の役の学習者は黒いコートを持って来て、電気を消した教室の窓から忍び込んだ。空港が舞台のチームは飛行機の飛ぶ音をテープに入れて持ってきた。ベッドで寝ている場面にはシーツを一枚用意した。立ったままシーツを首までもってくると寝ているように見える。いろいろ工夫をし、楽しんでいる学習者を見て、本格的なドラマ作りに踏み切ったのである。

「先生、もう一度撮り直したら絶対いい作品ができる」と学習者は言う。その通りである。しかし、撮り直しはしない。「今度こそは」という気持ちはエネルギーの源だ。次の学期のエネルギーの爆発を教師は夢見ているのである。

留学生のためにと振り袖一式を寄付して下さった中島祥江氏、ロケのためにホテルや会館との交渉をして下さった日本語センターの事務所の方々、店の中まで使わせて下さった帽子店やホテルの方々に囲まれ、作業を行える幸せを感謝したい。